

モントリオールでの留学生活

Universit de Montral

坂口 達也

(久留米大学医学部医学科自然科学教室)

私は、カナダのモントリオール大学に留学しています。カナダには10の州と3つの準州がありますが、モントリオール大学があるケベック州はカナダで唯一のフランス語が公用語となっている州です。そのため、モントリオール大学においても公用語はフランス語であり、モントリオール大学はフランス語の大学としては世界2位の規模をとっています。一方、カナダは移民を積極的に受け入れている国であるため、公用語がフランス語であるモントリオールにおいても、ほぼ全ての場面で英語が通じ、言語が苦手な筆者でも何とか生活することができています。むしろ、移民が多く、英語が公用語ではないことから、平易な英語表現が主に使われており片言の英語でも気にせずくみ取ろうとしてくれます。筆者のように英語に不安のある方は、英語が第一言語ではない国に留学すると会話面でのストレスは少ないかもしれません。

私の留学先である、Serohijos 研究室は生物物理学と集団遺伝学、進化遺伝学的なアプローチの統合によって、分子進化および微生物進化の原理解明を目的としています。また、同モントリオール大学の Michnick 研究室との super-group を形成することで理論と実験の両方の技術を用いた研究を実施していることが特徴としてあげられます。筆者は分子生物学を専門としており、実験面での貢献をしつつ、インフォマティクス的な手法を学ぶことを目的として Serohijos 研究室への留学を申し込みました。研究室の PI である Serohijos 博士はまだ30代と若く、新規の研究プロジェクトを並行して何本も走らせている非常に勢いのある研究室を主宰されており、筆者も留学時に申請したテーマがメインではありますが、それ以外にも複数のプロジェクトに参加することができ、文化的にも学術的にも様々な背景を持つ研究者と一緒に働くという得難い経験を積むことができております。

また、留学をして驚きと感銘を受けた点としては、共同研究が非常に活発であることが挙げられます。共同研究とまでいかなくとも、研究において少しでも疑問が出てくると、「これは彼・彼女が詳しいから聞いてみなよ」と学内・学外を問わず様々な人を気軽に紹介していただけることが印象的です。各人が専門家として強みを確立しており、密なコミュニケーションが行われていることが伺えます。このように研究者として非常に刺激的で実りの多い留学を過ごしておりますが、一方で COVID-19 の影響も多々ありました。モントリオール大学でも、一時期は都市ロックダウンに伴う研究室の閉鎖があり、研究計画の遅れや変更がやむを得ないこともありました。しかし、幸いなことに研究全体としては良い方向に進んで

おり、当初の予定では2021年の3月末までの留学予定でしたが、4月からもポストクとして雇用していただくことができ、研究を続けることができました。

最後に、このような貴重な機会を与えていただきました、上原記念生命科学財団の皆様に心より感謝申し上げます。



モントリオール大学本部